

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

自分にあたえられた人生の課題

平塚市立旭陵中学校

三年 星野章太

頑張ってもうまくいかないことがあったのはこのためだったのか。

僕は今「脊髄小脳変性症（遺伝性痙性対麻痺）」という難病に向き合っています。中枢神経の変性疾患で、両下肢のつっぱりと筋力低下を主徴とするもので根治治療はないそうです。

小さい頃から歩き方に特徴があるので母に「足のはこび方に気を付けてね」とよく言われてきました。自分では普通にしているのにどうして常に指摘されるのか分からず、言われる事が苦痛でした。体を動かす事は大好きですが、長時間、運動をしていると足が言うことを聞かなくなります。新しい靴を履いてもすぐに底に穴があきます。どうしてなのかと思ってきました。靴が簡単に作られているのかと思っていました。自分がそれだけ

足をうまく運べていないのでした。この心のモヤモヤを解決に導いて下さったのは中学二年生の時の担当の先生です。自分の歩き方などを気にかけて下さり病院へ行くことを進めて下さいました。母も僕の足に不具合があるとは思いながらも何かクセのようなものだろうと思っていたところ、その様なお話をいただいた時、正直驚いた様でした。

病院で詳しく診ていただいたところ、この難病であるということが分かりました。どうして自分は歩いているだけで転びやすいのか、ただ座っているだけで足がけいれんするのかずっと悩みだった事に、納得のいく答えをいただけて、まるで長い間完成しなかったバラバラのパズルが一気に解けた様な気持ちになりました。

しかし、同時に人生における重大な使命を与えられてしまったという、もうひとりの自分に出会ってしまったという複雑な気持ちにのみ込まれました。現実を突きつけられて、今まで不具合がありながらも何とかやってこれていた事も、ある時から自分の中では普通ではなくなってしまうました。

長い人生のまだスタートラインに立とうともしている僕に、描いていた未来に制約を受けような、様々な生きてゆくためのルールが与えられてしまったからです。

大人になってから歩けなくなる可能性があるので、今からできることはしっかりとやっていこうと主治医に言われ、リハビリは毎日欠かさずこなさなければならずその事を自分の中で早く受けとめようとすればするほど、心と体がちぐはぐになっていくのが分かりました。そんな時、担任の先生が言って下さった言葉を思い出しました。それはまだはつきり診断をい

ただく前だったのですが、「あなたはこれから長い付き合いになるものと向き合わなければいけないかも知れないけれど、自分の中でそのものと仲良くやってゆくことを考えなさい」と。言われた時は、何のことやらさっぱりでしたが、この状況になって初めて先生の言葉を理解し、自分を前向きにとらえようと思うことができました。「仲良く」が正に今自分の病と向き合うために必要なことだと思いました。

リハビリも毎日つづけるのは正直辛いです。疲れます。でも、理学療法士の先生には、努力は裏切らないから頑張りすぎずに頑張ろうと言われ、本当にそうだな、自分のために自分が努力してあげなきゃいけないと思えるようになりました。

この病氣と診断されてから自分の中で新しい何かが始まりました。それによりまたたくさんの方との出会い、お世話になり、力強さを感じます。

「仲良く」を軸に、これからの長い時間をもうひとりの自分と向き合い、決してあきらめないことを誓いたいのです。